〈文化人類学レポート〉

私の故郷、大草原だ

99K015　何　為民

神田先生から、夏休みのレポートにいただいたテーマは『おじいちゃんの生活史』でしたが、私はこの夏休みに帰れなかったので、特別のテーマを書かせていただきました。モンゴル族の事です。このレポートを書く時、いろいろな事が浮かんで、もう一度私の思い出は草原へ飛んでしまいました。

私は父の故郷、内蒙古の錫林郭勒盟（シリンゴルムン）で生れました。その後父は仕事の関係で、家族と一緒に今住んでいる都会、呼和浩特（フフホト）に移住しました。最初に草原へ行ったのは、私は何も覚えていませんが、あの時母に抱かれて、２歳でした。ちょうど「文化大革命」が起きていました。父はモンゴル族ですが、いわゆる「新内蒙古人民革命党」の組織の成員と言われて批判され刑務所に入れられていました。給料もなくなって、父と母の給料の30％分を生活費としてもらえます。父も毎週１回だけ家へ帰れることになりました。特に、私の上のお姉ちゃんは肺結核で、６歳ごろ天国の道へ行きました。このような貧しい、悲しい時、弟も生まれたばかりですから、どうしても私と弟は一緒に育てられなくなりました。「あなたの母親は、あの時泣きながら、あなたの弟を友達に委ねて、あなたをしっかり抱いて、草原へ来ました。」おじさん（父のお兄さん）が私に言いました。あれから、私は２歳から６歳まで、おじさんの家族と一緒に暮しました。父の状況が少しよくなって、毎日家に帰ることもできるようになりました。給料も以前の分の80％をもらえました。母はすぐ草原に来ました。母はそれ以前は毎年１回、私を見に来ましたので、１か月ぐらい母と一緒にいることができました。今度は母と帰ることになりました。私は大人の感情をあまり知らず、「ママ」と呼びながら、すこしずつ母と離れています。今思い出すと、後悔の気持が胸に強く寄せてきます。あれから、２年間父母と弟と一緒に暮らしました。短いけど、一生でも忘れられない時でした。私が８歳ごろ、母は病気で亡くなりました。

子供は６歳以前、言葉の形成の時期でしょう。あの時私は、毎日モンゴル語で話しましたが、中国語は「ママ」しかわかりません。そろそろ小学に入ることになります。母は非常に心配しました。「大丈夫だよ、子供は、言語の勉強が早いから、１年経たなくても中国語で自由に話せるだろう」と、父は言いました。父の言うとおり、小学校１年生も終らない頃私は中国語でしゃべれました。今は逆に、モンゴル語でだんだん話せなくなりました。聞くのはほとんどわかります。内蒙古自治区では、主にモンゴル族として、中学校でモンゴル語を勉強させています。モンゴル語や英語、日本語など、一つ自由に選択して、勉強することになります。その時、父の意見を聞くと、「やはり自分の民族のことばを学ぶほうがいいと思うよ」、父はそう言いました。だから、モンゴル語を中学校から高校まで勉強しました。週４回だけモンゴル語を学びます。もし月曜日に外国語の授業時間があったら、同じクラスの生徒でも、別の教室で勉強するのです。

高校を卒業してから、どうしてもあちこちに行って自分の目で見たい。ちょっと迷ったけど、

やっぱり草原を選択しました。母が生れたところへ行って見たい、おじさんの家族と一緒に過したい。決めてから、弟と二人のこの旅が始まりました。呼和浩特（私の住んでいる都会）から4時間ぐらい汽車に乗って集寧（シュニン）でバスに乗り換え、6時間かかって錫林郭勒盟の黄旗（ホンチイ）に到着しました。内蒙古の旗は、中国のほかの所の「県」と同じ行政区画の単位です。私が行く前に、父は手紙でおじさんにあらかじめ知らせました。私のいとこのお兄さんは、勒々車（ルルチャ）で迎えに来ました。勒々車は、モンゴル族にとって一番早い運送用具でした。それは昔の事でした。車体は全部木で作って、輪も木を丸く折って、まがるところをくぎで固定させました。おじさんは游牧民だから、旗よりもっと草原の深い所にいます。だから、勒々車に乗らなければ行けません。83年には、これしかなかったのです。但し、世界の経済がすごく発展している現代社会から見ると、すこしも進歩していないと見えるでしょう。その時代、自分の家にテレビとか、電話など通信用具があり、バスなどの交通機関が便利になっているけれど、遊牧民族は、どうしてか、少しも進んでいません。まだ800年前の勒々車を使っていますが、新聞やテレビなどニュースを見ると、いろいろな政策により、たくさんの資金を少数民族地区にやっていました。けれども私の故郷は十年前より、変化がなかった。当時19歳の私は、大人のように考えたけれども、理解できませんでした。到着まで30分ぐらいになった時、おじさんの家がはっきり見えました。黄色の道が緑の草原の中で、多少のカーブを現しながら、丘の中央部分に伸びている。そこに一つ土で建てた家がありました。この家は、呼和浩時市の近郊の漢民族の農村の家とほとんど同じです。十年前の「包（ポオ）」はありませんでした。

「タセンよ？」（こんにちはの意味です）。私は弟を紹介しながら、おばさんにあいさつしました。おじさんとはもう5年ぐらい会っていませんでした。13年前に母親が私を連れて行ってから、おじさんはほとんど毎年1回私の家族を見に来ました。しかし5年前、おじさんの身体が悪くなって、来られなくなりました。おじさんは私たちを見ると、何も言わず、顔だけ笑っています。目が笑う時もっと小くなって、見えなくなりそうな気がしました。私はおじさんと呼びながら、おじさんに抱かれました。その時ちょっと恥かしかったけど、おじさんの愛情を感じました。おばさんは、喜んで、私と弟の手を引いて家に入りました。落ち着かない私は、すぐおじさんに「包はどこにありますか？」と聞きました。「家の後にある」とおじさんが答えました。これは私が住んだことがある「包」ですか？　信じられません。以前の白さは全く見えません。黒くて、穴もありました。子供のころ「包」に住んだことは、とても自慢でした。今の包は、型だけ見えます。お兄さんは、1匹羊を引いて来ました。「この1匹はどうですか？」とおじさんに聞いています。おじさんは羊を見ながら、何も言わずに直接羊を囲ってある場所へ行きました。ちいさなナイフで、羊の首の下に、手を入れられる口を切りました。そして、手を口に入れて、動脈を探しました。そのあと、手で動脈を引っ張って、切りました。こういうふうにすれば、血が外にすこしも流れません。このような羊をつぶす方法は、モンゴル族独特の方法でしょう。私の場合は、子供のころに見慣れていましたが、弟は見てから、恐しくて、気持ちも悪くて、吐きました。羊をつぶす時、血はほとんど腹の中に流されました。このあとこの血を調味料とでんぷんと一緒に混ぜて、きれいに洗った腸の中につめて、肉と一緒に煮て食べます。これは女の人の仕事です。男は血をバケツの中に入れてから、腹を長く切って、内臓など全部取って、皮をはいで、骨に肉がついたまま細かく切ります。そのあと、鍋の中に水と一緒に入れて煮ます。だいたい20分経ってから、肉が赤から白くなると、皿に盛り、テーブルの上に置きます。肉の周りに、自家製のチーズや、バターや、炒米（中国語。モンゴル族の

常食である黍をヘット（牛脂）で炒ったもの）も置いてあります。テーブルの中央には、おじさんが座っています。私はおじさんの右で、弟は左に座りました。おばさんたちも順番に座りました。一つ家族みたいにとても親しく感じました。男は全部自分の前の杯の中に、お酒を入れてます。私も大人に見られて、アルコール分が62％の酒を入れてもらいました。この杯は、普通のコップの半分ぐらいの大きさです。モンゴル族は、まず乾杯する時、かならず３杯飲まなければいけません。これは習慣になっています。おじさんは、羊の胸の骨を私の前に置きました。これはモンゴル族の礼です。遠い所から来たお客様を一番尊敬しているという意味が含まれています。私に対して、礼は言いませんけれども、おじさんの愛情をすごく感じました。「我が子が、十何年ぶりの草原へ帰った（私はいつもおじさんの子供に見られている）皆楽しくやって下さい」とおじさんが言いました。人生で初めて酒を飲む私は、おじさんたちの愛情に染められて、アルコール分の強さも関係なく、３杯連続飲みました。その日、その晩、19歳の私は悲しい事、楽しい事を全部思い出して、笑って、泣いて、初めて酔払いました。

翌朝、私は横になったまま、おばさんが小さいテーブルを私の前に置き、「肉粥（ルーズオ）」を持って来ました。肉粥は、骨を煮てから、骨を取り、米と肉を一緒に入れて、煮てから食べます。日本のかゆと同じでしょう。私は、子供のころ、肉粥は大好きでした。

次の日、お兄さんと一緒に馬にまたがって、放牧にでかけました。だいたい４歳の頃、おじさんが馬に乗せてくれてだんだん乗れるようになりました。あのころ覚えた乗り方を忘れてしまったと思った私は、なんとなくうまく乗って走れました。

一か月、すぐ終りそうな気持ちがしました。この夏休みが終ってから、私も会社員になります。「そろそろ大人になるよ、人生はこれからね、よくがんばって行きなさい」とおじさんは別れの言葉を言いました。私は涙を浮かべながら、勒々車に乗って、帰省の道を踏んで帰りました。おじさんの目が見えなくなる微笑をちゃんと見て覚えました。これは永遠の別れでした。89年、おじさんは胃がんになって、亡くなりました。その時、私はもう一度故郷の草原へ行きました。日数は短くて、悲しい旅でした。

（文化人類学レポート指導教員　神田より子）